

審査の結果の要旨

氏名 大澤千恵子

大澤千恵子氏の「児童文学の宗教性——「宗教」・子ども・ファンタジー」は、一八世紀から一九世紀にかけて成立していった「児童文学」というジャンルにおいて、かつて支配的であった「宗教」がどのように取り込まれてきたか、また伝統的宗教とは異なるものとしての宗教性がどのような形で表現されてきたかを論じたもので、宗教研究と子ども観の研究と文学研究とが重なり合う領域の解明を目指した野心的な業績である。

大澤氏は児童文学の宗教性は、読者としての子どもを意識しながら空想の世界を描くファンタジーによって、超越的な領域を示唆しつつ、それと現実世界との多重性を描く枠構造の文学様式に基礎づけられているものと捉える。そしてこのファンタジー児童文学の様式を成立させたのがH・C・アンデルセンで、キリスト教とは異なる新たな宗教性を盛り込むことを可能にした。『人魚姫』に代表されるようにファンタジーの異教的な要素が「現実」ではない「子ども」の領域の事柄として表現される。それによって作品世界において、キリスト教でも異教でもないような新たな宗教性が構築される。

子どものための文学は、ピューリタンの宗教教育物語が早いものだが、それらは子どもを魅了する力をもつものではない。アンデルセンに先立って子どものための文学を生み出そうとしたペローの「昔話」やグリム童話はファンタジー児童文学の世界に近づいているが、なお教訓物語の性格を超えていない。子どもの心の自律的領域を尊び、そのことが新たな宗教性の提示につながっているのは、アンデルセン以後のことである。

大澤氏はこのような児童文学の宗教性がキリスト教を引き継ぐ西洋社会に限らないことを示し、他文化にも妥当することを宮沢賢治の作品を検討することで明らかにしようとする。賢治の場合も伝統的な仏教に対して、物語作品を通してのみ示しうるような宗教性の提示が目指されている。法華教を提示するかそれにかわる宗教性に徹するかについて、賢治には迷いがつきまとったことが示される。

本論文は宗教研究の視点から近代児童文学の意義を明らかにしたという点で独創的な業績だが、その独創性をどこまで貫き通せたかという点でなお問われるべき問題が多く残っている。しかし、独力で新たな研究領域を切り開いたことは確かでその意義は高く評価できる。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。